

## 題目

「登校拒否傾向のある児童と自己主張の強い児童との対比研究—ロール・レタリングによるアプローチ—」

## 著者

塚田厚弥\*      \* 楽田小学校

## 掲載誌

交流分析研究（日本交流分析学会） 2002 年第 27 巻第 2 号 pp. 124~131

## 分類

実践研究

## 問題および目的

小学校教員新任 2 年目に、4 年生担任クラスの女兒が登校拒否となり、約半年間家庭に引きこもった。ベテランの女性教員が家庭訪問をして女兒と親しくなり、速やかに不登校が解消した。この経験により、登校拒否児の性格特性に関心を持った。登校拒否児の自己主張困難な「言えない」性格傾向となる、自我状態 CP の低さに注目した。思ったことを言葉に表すという訓練が主張性の低さを改善する手段になると考えた。想定した架空の人物と手紙のやり取りをするという、役割書簡法（ロール・レタリング）を登校拒否傾向のある児童に適用し、主張的な自我状態の活動を促進することを試みた。自我状態の機能にロール・レタリングの効果が現れれば、エゴグラム MIE（新称 IUE）の自己志向機能的自我状態尺度値と他者志向機能的自我状態尺度値に変化が観察されると考える。典型的な自己主張が強い児童との比較を含め、ロール・レタリング実施前と実施後の機能的自我状態尺度値の比較により、予測を確認する。

## 方法

対象者：小学校 4 年生男児 M。登校拒否傾向を示し、3 年次の三分の一は登校を渋って母親と登校した。自己主張が苦手である。

比較対照者：同クラスの 4 年生男児 K。大声で泣いてでも自分の思いを通し、周りの迷惑を顧みない典型的な自己主張タイプである。

言語化訓練課題：クラス内の想定した相手に仮想の手紙を書くロール・レタリング法を、K と M に適用した。

自我状態機能変化の測定：自己志向する機能的自我状態と他者志向する機能的自我状態を測定する質問紙エゴグラム MIE（新称 IUE）を、ロール・レタリング施行の前後に実施した。

## 結果および考察

事前テストにおける K の尺度値：他者志向側面では UCP が最も高い（平均偏差 + 7 点）。相手の意見を受け入れない独断的傾向がうかがえる。また UAC も高い（同 + 5）。うまく受け入れられようとする他者順応的意識がかなり強いと見られる。自己志向の側面では、IAC が最も高い値（+ 6）である。寂しがり屋の特徴がうかがえる。自己志向

他者志向エゴグラムのパターンから、Kは完全志向の傾向があり、他者を気にしながら独りよがりの努力をして、それが望むような友達関係の結果にならないことで、孤独感と攻撃性のアンビバレントな状態になっていることが推測される。

事前テストにおけるMの尺度値：全体に尺度得点が平均値を下回っている。IAC（自己志向AC、平均偏差-8）が最も低く、UCP（他者志向CP）も低い（-6）。人と関わりが少ない、一人遊びができる、一人になっても寂しさを感じない性格が読み取れる。エゴグラム・パターンは他者との交流に関心が低く、積極的働きかけ行動を避けて自分の世界に引きこもることで安定を確保する傾向が認められる。外見的観察と一致する。

事後テストにおけるMの尺度値変化：UCPが平均偏差-6から+1に変化した。主張性の向上が見られる。UNP（他者志向NP）は同-6から同-3に上昇、UA（他者志向A）の上昇（-4から-1へ）、UACの上昇（-4から0へ）が見られた。他者への親密性の向上、現実場面適応行動の活性化、他者との協調・順応的関わり意識の促進がうかがえる。自己志向エゴグラムでは、ICPの上昇（-2から+1へ）、INPの上昇（-3から0へ）、IAの上昇（-4から+1へ）IFCの上昇（-7から-4へ）が観察された。自己目標の明確化、自己省察の亢進、内面のイメージや感情の活性化が生じたことが推測される。対人関係に自信が持てるようになり、自己決定能力が向上したと考えられる。

ロール・レタリングに現れた特徴：自己主張の強いKは直截な攻撃的言葉を書いていたが、書くことがないと言って途中で中止になった。ストレートに主張し感情表出を行っているので、鬱屈した感情を役割書簡に表現する必要がないようである。対照的に登校拒否傾向のあるMは、「だいたいまえだけど」や「～しそうになったけどやめといた」という言い方のように、感情を抑え込んで執念深く思い続ける性格をうかがわせる表現が見られた。

考察：主張的なKは自分の他者支配的欲求を他の児童と協調的な形で充足することができない苛立ちを、その場で言い争い、けんか、泣いて騒ぐなど直接行動で発散させている。一方主張性の低い登校拒否傾向児であるMは、嫌なことがあっても、それを十分言葉で表出できず翌日まで不快感情を持続させる。不快感情が悪循環的に累積して引きこもりや身体症状に転化しやすいと考えられる。ロール・レタリングによる自己内面の表出行動は、他者との交流が安全で心地よく、親密感を感じさせることができ、自分の行動についても肯定的に自覚できたのではないかと思われる。自己を対象として役割書簡を行う自己表出法は、登校拒否予防の一助になると考えられる。自己志向・他者志向エゴグラムパターンの特徴と、KおよびMの行動観察特徴は良く一致した。

（要約者：西川和夫）